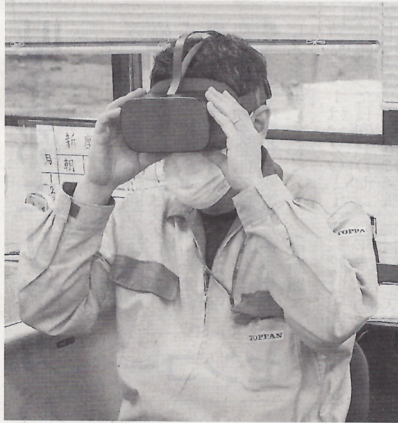


事故削減率 87%!

ドライバー教育にVR機器導入

高い臨場感 事故87%減

自分の運転が周囲からどう見えているのか、どう運転すれば避けられるのかが分かりやすい



導入したのは、物流会社を開発するWacWac向けVR安全教育サービス（佐々木章太社長、練馬区）

管理側の業務負担も低減

凸版物流（山野泰彦社長、東京都板橋区）は22年7月にVR（仮想現実）技術を使った交通事故防止教育を導入し、3月末までに前年比87・5%減の1件まで事故を削減した。VR教育を体験したドライバーは「自分が事故を起こしたかのような感覚で学べた」と語り、以前よりも高い「臨場感」が効果を発揮している。VR教材の導入で管理側の業務効率化も進んでおり、通常1年かかるドライバーの指導監督指針である法定12項目の教育を年4回サイクルで実施している。今後は協力会社への水平展開も進める。（佐々木健）

凸版物流

が開発した「くわくわく」監視システム。運輸安全マネジメントシステムに対応し

個別指導、成果高まる

VR教材は右左折時の事故や追突など、多様な事故事例が動画化されている。従来の絵や静止画、ドライブレコーダー画像からの1番の変化は臨場感だ。VRゴーグルには運転席からの視点、トラックの様子を第三者として外側から見る視点などを用意している。運転席で顔を前後左右上下、任意の方向に動かせば、キャブ内や窓の外の光

たドライバー指導と記録作成により、運行管理者の事務負担を軽減することを目指している。凸版物流では埼玉、神奈川、静岡の各県の自社ドライバー51人を対象に、5月下旬に導入した。現在、各拠点に教台のVRゴーグルを設置している。VR動画は1回当たり4、5分間で終わるため、ドライバーは各拠点での待機時間などにゴーグルを装着している。

導入以前は四半期に一度、集合教育で法定12項目に基づいて従業員教育を行ってきた。こうした集合指導はドライバーの業務のある日避け、土曜日などに実施。遠隔拠点からはバスなどで移動する必要があった。教材の準備も、12項目を網羅しドライバーのマンネリ感を打破したものを集めるには時間がかかり、準備だけで年間96時間程度を要していたという。

VR教材は右左折時の事故や追突など、多様な事故事例が動画化されている。従来の絵や静止画、ドライブレコーダー画像からの1番の変化は臨場感だ。VRゴーグルには運転席からの視点、トラックの様子を第三者として外側から見る視点などを用意している。運転席で顔を前後左右上下、任意の方向に動かせば、キャブ内や窓の外の光

景がドライバーと同じ感覚で再現され、事故を仮想的に体験できる。ドライバー教育を担当する、関東物流本部自社車両管理課自社車両管理グループの岩佐悟主任はこの効果について、「ヒヤリ・ハット動画の教育効果が高い」と話す。「ドライバー目線だけでなく、車外から事故状況を客観視することで自分の運転が周囲からどう

見えているのか、どう運転すれば避けられるのかが分かりやすい」と指摘する。従業員教育を集合研修から個別指導に転換したこと、教育のスピード感が大きく変わった。今までは12項目の教育に1年間かけていたが、四半期内に12項目の教育を終えられる。年に4巡程度の早さで、現在44種類用意された動画を見ている。学習の成果

は高く、21年度は計8件の事故があったが、22年度は87・5%減の1件に削減した。

今後の課題について、東日本統括本部輸送管理部長の田所秀雄部長は「我々の目標は事故ゼロの達成だ。人命尊重という理念がドライバーに伝わるのが大切」と強調し、協力会社を含めた水平展開にも意欲を示す。



協力：凸版物流株式会社様

出典：株式会社物流ニッポン様掲載記事

日付：2023年4月18日火曜日